

# 家庭科からみた科目の選択傾向

## — 家庭科の現状と課題 —

家庭科 間瀬 昭子

### はじめに

本校が総合学科に改編して4年目を迎えた。総合学科は単位制と選択制を柱とする第3の学科である。

本校の総合科学科（総合学科名）は、これまでの伝統と実績のある職業教育を中心に据えた総合学科である。農業・工業・家庭・商業の類型にそれぞれ2系列をつくり、4類型8系列を設けている。

1年次の9月に、後期から始まる系列基礎科目と2・3年次に履修する科目を全て選択する。

これまでの職業学科時代と変わり、根本的な改革が行われ、授業は選択制となり、これまでの同一カリキュラム時とは授業も生徒の気質もまったく異なった雰囲気になってきている。

生徒の履修科目選択調査をもとに、生徒が諸々の制約の条件下でどのような選択を行っているかを検討し、授業を行う上でどのような点に変化したか、特に家庭科の

変化を明らかにしたいと考え、この調査を行った。また併せて家庭科の現状を検討した。

### 1. 本校総合科学科のカリキュラム

本校のカリキュラム一覧表は省略する。

種別・年次別に科目の単位数をまとめると、表1のようになる。本校では、必修科目の単位を指導要領に定められた最小限の単位としている。その他、総合学科独自の原則履修科目6単位がある。それらの合計を87単位から除いた単位数、46単位が選択科目の単位である。

表1 科目種別別単位数 (単位)

	1年次	2年次	3年次	合計
原則履修科目	4	0	2	6
必修科目	19	13	3	35
選択科目	6	16	24	46
合計単位数	29	29	29	87

表2. カリキュラム比較（職業科目・総合科学科は家庭科目のみ） (単位)

家庭科 科目	家 政 科			家 政 科 学 科			総 合 科 学 科 (家 庭 科 目)		
	必修	選択	単位数	必修	選択	単位数	必修	選択	単位数
家庭科 目	家庭一般		4	家庭一般		4	必修	家庭一般	4
	被服		1	産業情報基礎		2	選択	服飾デザイン	2
	食物		1	産業基礎		2		アパレル技術Ⅰ	4
	保育		3	現代技術		2		アパレル技術Ⅱ	4
	家庭経営・住居		2	保育		2		ソーイング	4
				消費経済		2		ハンドクラフト	2
				家庭看護・福祉		2		調理Ⅰ	2
				課題研究		4		調理Ⅱ	2
								調理Ⅲ	4
								食品	2
						栄養		2	
商業	計算事務		2	服飾デザイン系			食品衛生	2	
				被服製作		6	保育	2	
				被服材料		2	消費経済	2	
							家庭看護・福祉	2	
							クッキング	2	
合計			33			30			42

## 2. 家庭科カリキュラムの比較

本校では、「家政科」が平成5年度に「家政科学科」に改編された。この2つの学科と総合科学科の家庭科のカリキュラムを比較したものを、表2に示した。

## 3. 本校家庭科教育の現状と問題点

### (1) カリキュラム上の改革と問題点

総合学科になっての画期的な家庭科の改革は、平成6年度より家庭科の科目「家庭一般」が全生徒の必修科目としてカリキュラムに組み込まれたことである。職業学科時代には女子クラスの家政科と生活科では勿論必修であったが、男子クラスの機械科と農業科にはなく、それぞれ機械技術科・生物資源科に改編されたときにはじめて2単位が組み込まれた。

家庭一般はすべての生徒に「生きる力」をつけ、生活上の諸問題を「社会的かつグローバルな視野で解決する力」を養う上で重要な科目であり、男女共修は必然であり、望ましい方向であると考えられる。

家政科時代には、同一カリキュラムを全ての生徒が定められた学年で履修した。総合学科の場合は、積み重ねの履修条件のある科目を除いて、生徒各自の興味・関心により、2年次にあるいは3年次にと自由に科目を選択できる。そのため、科目間の連携がとりにくくなったところもあり、知識・技術の積み重ねや関連させた学習が部分的に難しくなっている。

また、表2のように、家政科時代には科目をあまり細分化せず、食領域は「食物」、被服領域は「被服」という科目ですべてをカバーしてきた。例えば「食物」では、「食品」「栄養」「食品衛生」「調理」「食の歴史」などを包含しているため、生徒の実態、地域性、季節、授業の進度や調理との関連など、さまざまな条件を配慮した年間計画が立てられるので、実施時期や時間配分に融通がきき授業が進めやすかった。

家政科学科は、翌年、総合科学科が創設されて一学年のみの学科であったが、服飾デザイン系と食物栄養系のコース制を設けたため、被服分野・食物分野をそれぞれ3科目に分化した。総合科学科では、選択科目を多くする必要もあり、「食物」をさらに5科目とし、自由選択科目として「クッキング」を加えて6科目とした。そのため、内容も非常に専門的になり、系列外の生徒には選択しにくいところがあるのかもしれない。

職業学科時代には、最後の一学年は学科改編されて全ての学科が男女共学になったものの、学科の枠を越えた

学習は不可能であった。総合学科となり、男子生徒の家庭系科目や女子生徒の工業系科目の履修が一段と増加した。初年度以来、調理、服飾デザイン、アパレル技術I・IIなどの実習科目を初めとして全ての科目で男子生徒の学習が見られるようになった。

しかし、家庭科は、科目の性格上コツコツと積み重ねて初めて身に付く技術であるため、資格取得に結びつくものがない。家政科・家政科学科時代には、資格取得のため、他教科の協力を得て簿記の講習をお願いしたり、家庭科教官が放課後にワープロの指導を行っていた。

現在の総合学科では、学科の枠というものはなくなり、自由に科目を選択することが出来るので、生徒の希望は可能な限りにおいて生かされるようになり、また上記のような家庭科教官の苦労も解消された。しかし、依然として家庭科目の学習において、高校生で取得できる資格というものは少なく、就職や進学に有利に結びつくものは皆無といってもよい。学校全体が、検定や資格取得を目指す雰囲気が強くなってくると、家庭科教官としては居心地の悪さを感じることもある。しかし、家庭科本来の教育目標を達成するよう努力することが、家庭科教官の本来の務めと考える。

### (2) 時間割上の問題点

総合科学科の時間割は、まだ職業科の家政科3年生と家政科学科2年生が在学している状況下で作成された。そのため、時間割は自由に組むことができず、次のような問題点が生じている。

- ① 同一時間帯に家庭科科目が3科目あることがあり、生徒の選択の幅を限定すること。
- ② 逆に1科目しかない時間帯が多く、生徒のニーズに応えられない。
- ③ 調理系と服飾系両方を選択したい生徒が選択しにくい。
- ④ 科目担当者が固定される傾向にある。
- ⑤ 折角の施設の有効利用が出来ていない。これは、必修科目と2・3年次選択科目の時間帯が固定で、時間割を移動させられないためである。  
例えば、調理室は水曜日には調理科目が全くなく、火・木・金に集中しており、実習が重なったときの調整が大変である。
- ⑥ 2単位科目が多いため(被服分野以外)、1教官の担当科目数が6科目にもなっている。
- ⑦ 他類型に比べ、選択科目数(選択単位数)が少ないので、生徒の選択に不便を生じている。家庭科目のみで30単位選択は不可能に近い。

これは、現状の人員・施設でも可能なカリキュラムと  
いうことで設定されたためである。

### (3) 授業における問題点

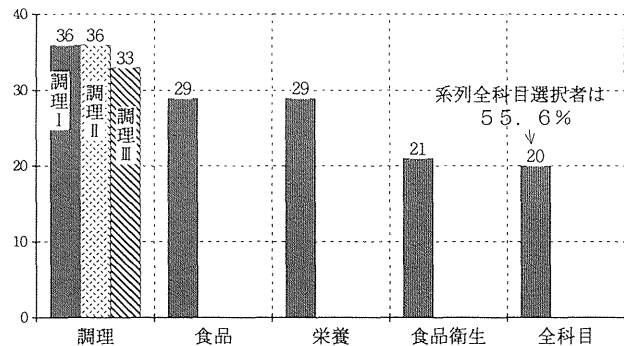
#### ①食物栄養系列

全ての系列科目(調理II・調理III・食品・栄養・食品衛生)を履修しているかどうかみると、図1に示すように、94年度入学生(36名)中の33名(91.7%)が調理II、調理IIIは選択しているが、食物栄養系列の全科目を選択した生徒は55.6%、95年度入学生は36.7%、96年度入学生では75.9%となっており、年度により著しい差がある。

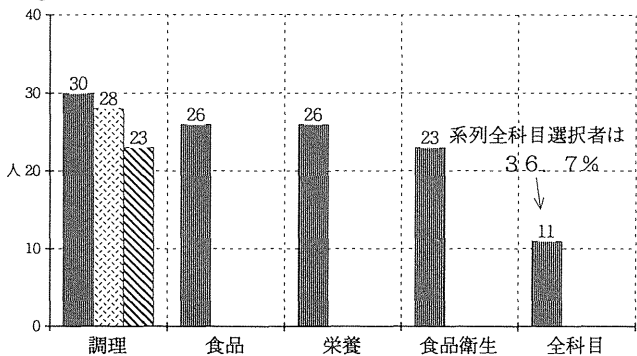
調理I・II・IIIと積み重ね、調理理論と技術に加えて「食」について広く、深く学習するために、「食品」「栄養」「食品衛生」などを選択し、学習してもらいたい、「つくる」ことには興味を示すものの、一部には理論を避けがちな傾向も見られるようである。

図1 食物栄養系列科目の選択内訳

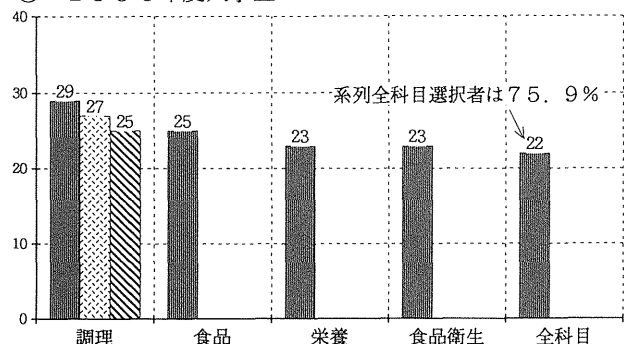
① 1994年度入学生：調理I選択者



② 1995年度入学生



③ 1996年度入学生



また、調理IIが2単位で週1回の授業(月曜日)であるため、振り替え休日などで時間が削られることも多く、2年次で調理の知識と技術の積み重ねがスムーズにいかなくなってきている。調理IIも4単位に増やしたいと考えているが、様々な理由から実現できないでいる。

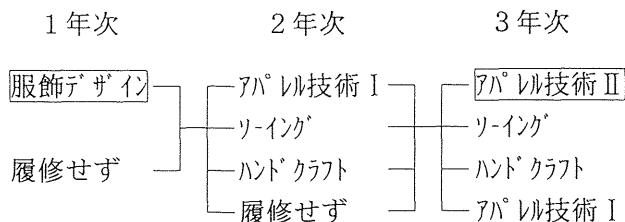
#### ②アパレル系列

より複雑な科目選択が行われているのがアパレル系列である。1年次系列基礎科目・服飾デザイン履修がその他の科目の選択条件にないため、2・3年次で自由な選択が可能となっている。そのためアパレル系列の科目選択者には系列外の生徒もかなり多い傾向にある。

特に、食物栄養系列生の選択者が多く、以前の家政科の生徒と同様に被・食両方を学習する生徒である。

選択の仕方を見ると[A]の様に、いろんな選択が可能である。その結果[B]の様に同一クラスに年次も異なるいろんな段階の生徒が混在する。そのために、同一教材での一斉指導は不可能となり、2名の教官による多様な教材での指導が行われ、指導内容も複雑で、担当教官の負担も大である。

#### [A] アパレル系科目選択のしかたの例



( [ ] 内の科目のみ履修年次が定められているが他の科目は自由に選択できる)

#### [B] 今年度の「ソーイング」における指導例

- ・生徒A (3年次) ワンピース製作 (アパレル技術Iを2年次に履修済)
- ・生徒B (3年次) ジャケット製作 (アパレル技術Iを履修せず)
- ・生徒C (2年次) ワンピース製作 (アパレル技術Iとソーイングを同時履修中)

このように「ソーイング」においては、各生徒の履修状況に応じて、教材や指導内容が異なっている。

## 4. 科目選択の傾向

### (1) 科目選択における傾向

本校の各類型の選択科目数及び単位数は表3の通りである。I類については、時間割外の選択科目を含む数値

である。(時間割外科目は年度により異なっている)

表3 1996年度 2・3年次選択科目数と単位数

		I類	II類	III類	IV類
選	科目数	21	20	13	15
択	単位数	44	44	34	38

1年次後期選択科目・系列基礎科目を選択した生徒をその類型の生徒として想定して、科目選択数を調査した。(表4以下)

表4、5に各科目の選択数をまとめた。先に図1で示したように、系列基礎科目を履修した生徒が、必ずしも系列の科目を全て選択するとは限らないことがわかる。

従来の4学科のうち、3学科(農、工、家)がI類、II類、III類という類型に変化した。IV類は総合学科に改組されて新たに設置された商業科の類型である。

各類型生が各教科をどのように選択したかを、単位数別に96年度入学生で比較したものを、図2～5に示した。(95年度生の傾向も同様であったので省略した)

I、II、III類では突出した部分が見られるが、IV類はなだらかな丘を作り、他教科の科目も少数ずつではあるが、よく選択していることがみられる。

I類は高い部分はあるものの、他教科の科目もかなり選択している。これをさらに、平均単位数で比較したところ、図6のようになった。平均の単位数の最も高いグラフは、高単位の所に山の合ったII類であるが、次いで

図3 II類生の類型教科別選択単位数分布  
96年度入学生(40名)

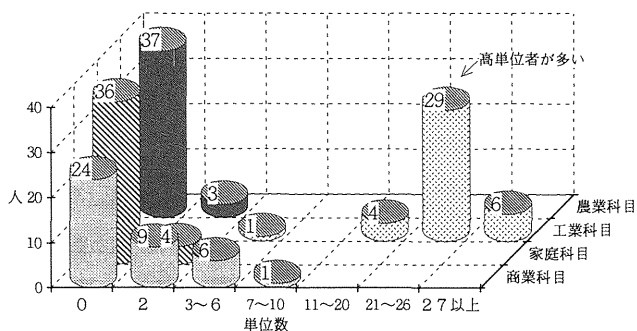


図4 III類生の類型教科別選択単位数分布  
96年度入学生(40名)

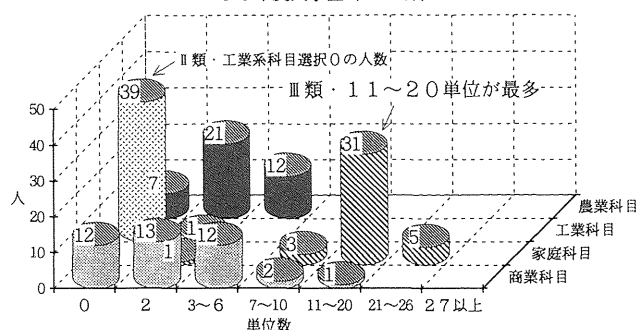


図2 I類生の類型教科別選択単位数分布  
96年度入学生(37名)

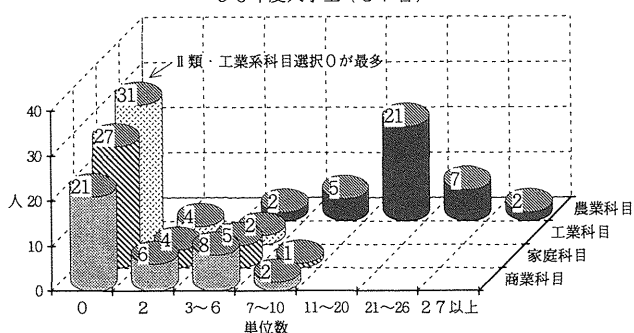


図5 IV類生の類型教科別選択単位数分布  
96年度入学生(43名)

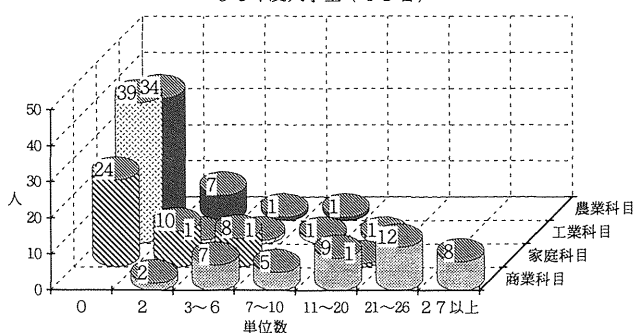


表4 「調理I」履修者：III類・食物栄養系列の家庭科目選択数 (人)

年度	選択人数	家庭科選択科目													
		選択内 男	選択内 女	調理II	調理III	食品 栄養	食品 衛生	アパレル 技術I	アパレル 技術II	ソーイング	ハンド クラフト	保育	消費 経済	家庭看護 ・福祉	クッキ ング
94	36	4	32	36	33	29	29	21	6	2	16	19	5	8	7
95	30	2	28	28	23	26	26	12	5	1	8	12	15	10	7
96	29	2	27	27	25	25	23	23	4	0	10	19	15	5	5

表5 「服飾デザイン」履修者：Ⅲ類・アパレル系列の家庭科目選択数

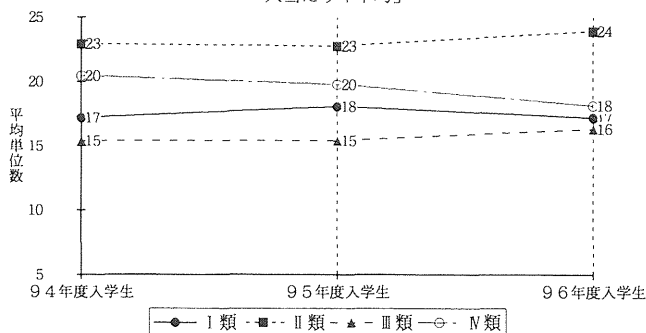
年度	選択人数	選択内訳		家庭科選択科目													
		男	女	調理Ⅱ	調理Ⅲ	食品	栄養	食品衛生	アパレル技術Ⅰ	アパレル技術Ⅱ	ソーイング*	ハンドクラフト	保育	消費経済	家庭看護・福祉	クッキング*	
94	3	0	3			2	1	0	3	3	3	3	1	1	1	1	
95	12	1	11			7	6	3	7	11	12	10	4	5	1	7	
96	11	1	10			5	5	1	11	11	10	8	4	6	3	4	

高いのはⅣ類商業科である。2・3年次選択科目の50%前後もの単位を、Ⅱ、Ⅳ類ではその種類の科目で履修していることを示している。Ⅱ・Ⅳ類では他種類の科目も選択するけれども、主たる選択は所属類型である。それに比べると、Ⅲ類は家政科時代と大幅な変化を見せている。選択科目は多類型に渡り、従来の生活科の科目内容を思わせるところがある。これは、家庭科目が少ないことや資格取得の目的などと関係していると思われる。

が、Ⅲ類では極めて少ない。これは家庭科目の科目数が少ないこと、時間割上で重なる科目の多いことなども原因として考えられる。また、大学進学への推薦条件として30単位以上という条件が、家政系大学ではあまり示されないことにもよると思われる。

類型科目を26単位以上選択している生徒は、Ⅱ、Ⅳ類に15%程度みられ、2・3年次選択時数40時間のうち32時間以上その種類の科目に当てていたり、40時間すべてが職業科目選択という生徒も94、95年度入学生には見られる。(表7参照)

図6 所属類型教科の選択単位数の比較  
一人当たり「平均」



類型毎の選択傾向については、後でさらに述べることにする。

(2) Ⅲ類生徒の選択傾向

① 家庭科目の選択

家庭科目の選択傾向については、11~20単位が最多で82.1~73.8%。21単位以上の生徒も若干名存在する。表6のように、6単位以下の生徒も1~3名みえる。

これは途中で進路変更した生徒達が多い。

4つの類型の中では、図7、8のように、それぞれの種類の科目を26単位以上選択している生徒がかなりいる

図7 所属類型科目選択単位数別割合  
95年度入学生

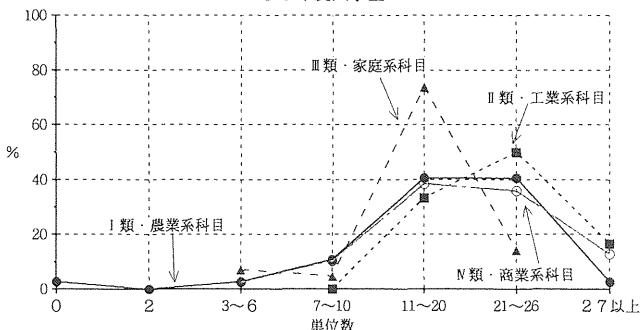


図8 所属類型科目の選択単位数割合  
96年度入学生

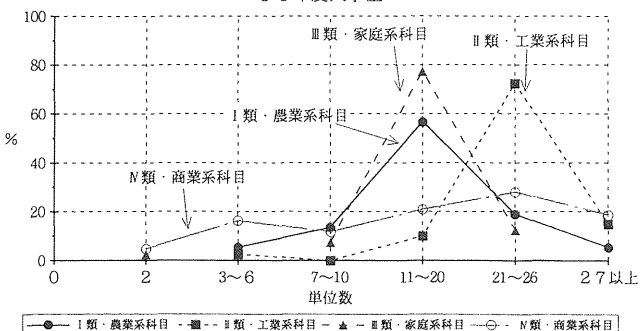


表6 Ⅲ類：家庭科目単位数別頻度（3年間） (人)

年度 \ 単位	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	合計人数
94	1	1			2	6	8	5	12	1	2		1		39
95	1	1	1	1	1	5	10	7	6	4	3	2			42
96	1			1	2	5	8	4	6	8	2	2	1		40

表7 選択職業科目（農・工・家・商合計）単位数別頻度（3年間）（人）

単位 年度	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	合計人数
94	1	1	3	1	5	5	1	1	14	17	23	22	12	9	16	11	8	4	3	2	159
95	1	0	1	1	3	6	8	7	11	11	19	20	24	18	8	8	5	7	1	1	160
96	0	2	4	4	1	8	6	9	14	12	14	27	25	15	10	4	1	3	1	0	160

食物栄養系の生徒で、食物栄養系列科目を全部選択している者については、先に述べたように年度により異なる傾向をしめし、選択人数の予想もつけにくい。また、かなりの生徒がアパレル系科目を選択しており、選択できない服飾デザインを除く全科目を選択している生徒もいる。多くの生徒が選択している科目はソーイングとハンドクラフトである。

アパレル系選択者は初年度3名と少数であったが、その後3年間は12名前後の数に落ちついてきている。

アパレル系列生徒の全科目選択者は、70%以上を超えることが多く、また「食品」「栄養」の選択者も50%を超えている。

## ② 他類型科目選択

表8にみるように、Ⅲ類の生徒は農業系、商業系の科目はある程度選択するが、Ⅱ類・工業系科目に関しては、ほとんど選択していない。これは他類型の生徒よりも少なく、特徴的である。

農業科目の選択も年々減少傾向にある。農業系科目の選択は食物栄養系列の生徒に多くみられ、「食品製造」選択者が94年度生19名、95年度生8名と多かった。その後全体の「食品製造」選択者が増加し、Ⅰ類系列基礎科目履修という制限事項が設けられ、Ⅰ類以外の生徒は履修

不可能となった。また、「グリーンデザイン」選択も75%（96年度生24名）と非常に多い。

Ⅲ類型生徒はⅣ類・商業系科目を、よく選択しており、ビジネス英語・文書処理に多くの生徒が集中している。

（表8参照）

94年度入学の一期生は選択科目数が多い。これは1学年のみの選択であり、人数制限があまりなくかなり自由に選択できたためである。非常に少人数の授業も実現し、「食品」でもわずか4名の授業を行うことができた。

一期生は授業そのものが模索試行しながらの研究段階の事が多かったが、一期生のうまみも享受したのではないかと思う。2、3期生になると施設・設備や担当教官数、講師時間等の問題からかなり選択制限が設けられ、選択が厳しくなってきた。

## （3） 他類型生徒の家庭科目選択について

### ① 類型と科目選択の傾向

類型別に科目選択の傾向について調べてみた。

他類型生徒の家庭科目選択は、表9にみる通り、「クッキング」が多い。特にⅡ類では、96年度生では「クッキング」のみで、家庭科の他科目の選択者はいない。

Ⅰ類・農業系、Ⅳ類・商業系は女子生徒が多いためか、比較的家庭科目を多く選択している。中でもⅣ類は95、

表8 Ⅲ類生徒の他系列科目選択人数（人）

年度	Ⅲ類	農 業 科													
		生物工学基礎	生物工学	飼育技術Ⅰ	食品製造	食品科学	栽培環境	緑地学Ⅰ	エコジ'A	アメリティデザイン	ランドスケープ	グリーンデザイン	植物生態	動物生態	生活園芸
94	39	1	1	10	19	7	1	1	5	0	2	24	2	2	17
95	42	5	3	2	8	4	1	4	0	1	1	13	2	1	7
96	40	0	0	3	0	0	1	2	0	2	0	30	0	2	8

工 業 科			商 業 科											
プロ技Ⅰ	プロ技Ⅱ	ハードウェア技術	計算事務	法律知識	ビジネス英語	商業デザイン	マーケティング	商品知識	工業簿記	流通経済	文書処理	簿記	情報処理	ビジネスマ-
2	0	1	4	0	16	0	0	0	2	4	14	5	6	1
1	1	0	0	2	20	7	5	4	3	2	20	10	7	2
1	0	0	1	1	15	5	4	3	0	3	15	2	6	1

※プロ技はプログラフィック技術の略称である。

96年度とも20名が何らかの家庭科目を選択している。

表9 他類型生の家庭選択科目と選択人数 (人)

類型	年度	家庭科選択科目										
		食品	栄養	食品衛生	アパレル技術I	アパレル技術II	ソーイング	ハンドクラフト	保育	消費経済	家庭看護福祉	クッキング
I類	94	4	2	1	0	0	2	5	4	0	2	7
	95	3	2	4	0	0	1	3	11	0	2	4
	96	3	3	5	0	0	1	7	7	1	7	9
II類	94	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	7
	95	1	1	0	0	0	0	1	2	0	0	10
	96	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
IV類	94	6	1	1	0	2	3	5	7	3	3	25
	95	9	3	1	1	1	2	3	11	1	2	10
	96	1	1	0	0	0	1	1	6	1	5	16

II類生は農・家庭科科目については3年間とも1科目・2単位のみが多い。また、半数近くが商業科目を若干選択している。

#### (4) 他類型の職業科目を全く選択していない生徒について

図9のように、I・III・IV類では工業系科目を全く選択しない生徒がかなり高率を占めている。

年度により変化があるものの、96年度入学生でみると、I類生84%、III類生98%、IV類生91%が全く工業科目を選択していない。この傾向は3年間同じである。工業科目の専門性、生徒の興味・関心の方向性を示す数値とも言えよう。

図9～12のグラフからもIII類生は、I、IV類科目については何らかの科目を選択している生徒が多いことがわかる。

図9 工業科目を全く選択しない生徒の割合

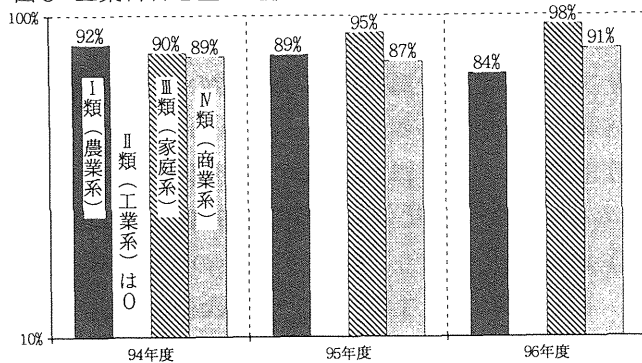


図10 農業科目を全く選択しない生徒の割合

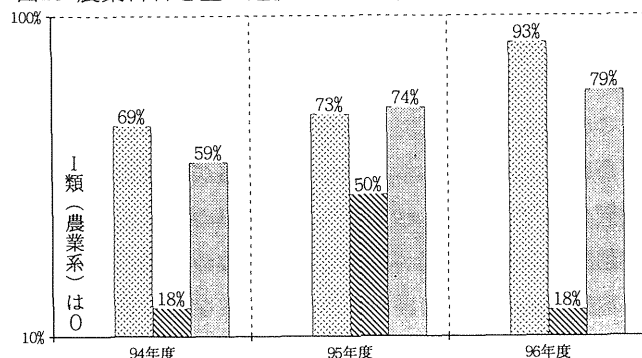


図11 家庭科目を全く選択しない生徒の割合

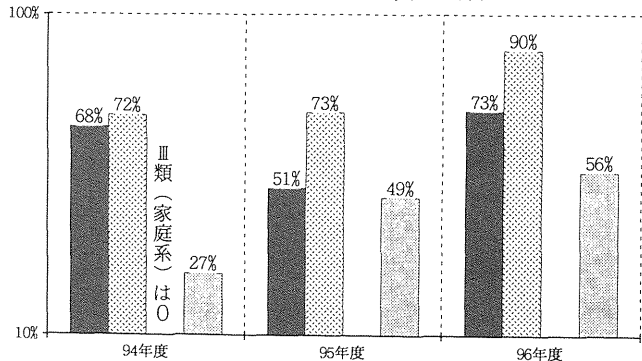
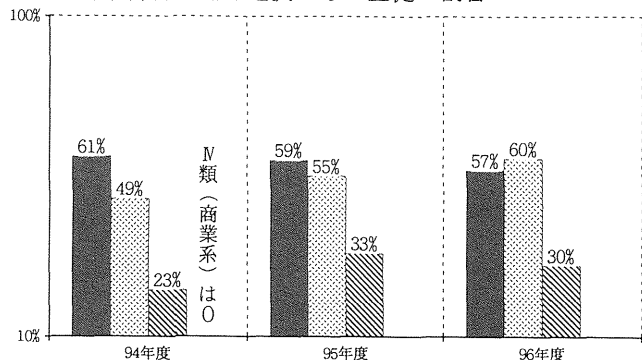


図12 商業科目を全く選択しない生徒の割合



## 5. 授業クラスの構成員

生徒の2・3年次科目の選択についてはこれまでに見てきたような傾向であるが、実際の授業には2年次生と3年次生が混在しており、複雑である。

家庭科目の各年度における授業の構成員について調べ、以下の表にまとめた。

2年次家庭一般の授業はクラス単位で行っているの、そのクラスの構成内訳と同じである。表10のように、クラスの構成は、全く均一とは言えないが、各系列の生徒達が程よく分散している。

III類型科目の授業でみると、「食品」「栄養」クラスにはどの類型生も少数ながら存在するが、アパレル系科目のクラスにはII類生は0、I・IV類生が1～2名で、90%近くをIII類生が占めている。

その他、「消費経済」クラスは3年間ともIII類生とIV類生のみで、I・II類生には興味関心がないように思われる。

自由選択科目「クッキング」には、「調理I」選択者以外の全ての系列の生徒が混在し、中でもIV類生が多く、またII類生の選択数も多くなっている。

各年度の授業構成員内訳

表10 2年次のクラス構成内訳(類別・系列別)

年度	クラス	I 類		II 類		III 類		IV 類		クラス合計
		農業基	環境科	工業基	調理 I	服飾予	商業基	合計		
95年度	A組	5	4	10	9	1	10	3	9	39
	B組	6	4	10	9	1	10	4	4	40
	C組	6	4	9	9	0	12	4	0	40
	D組	5	4	10	9	1	11	4	0	40
	合計	22	16	39	36	3	43	15	9	159
96年度	A組	6	4	10	6	4	10	4	0	40
	B組	2	6	10	11	2	8	3	9	39
	C組	4	6	12	7	3	8	4	0	40
	D組	3	5	10	6	3	13	4	0	40
	合計	15	21	42	30	12	39	15	9	159
97年度	A組	3	8	9	6	2	12	4	0	40
	B組	3	2	12	4	2	17	4	0	40
	C組	3	6	10	8	5	8	4	0	40
	D組	3	9	9	11	2	6	4	0	40
	合計	12	25	40	29	11	43	16	0	160

表11 各年度の授業構成員内訳

(1) 食品・栄養授業選択者の内訳

① 1997年度(平成9年度)

		調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
食品	2年次	4	1					
	3年次	16	7	2	1	1		9
	計	20	8	2	1	1		9
栄養	2年次	2	2		1			
	3年次	14	6		2	1		3
	計	16	8		3	1		3

② 1996年度(平成8年度)

		調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
食品	2年次	28	2	2	1	1		6
	3年次	10						
	計	38	2	2	1	1		6
栄養	2年次	31	1	1	1	2	1	
	3年次	12						
	計	43	1	1	1	2	1	

③ 1995年度(平成7年度)

		調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
食品	2年次	3		1				
	計	3		1				
「栄養は開設せず」								

(2) ソーイング・アパレル技術 I

① 1997年度(平成9年度)

		服'サ'	調理 I	農業基	環境科	工業基	商業	合計
ソ イ ン グ	2年次	9	1					
	3年次	2	7		1		2	
	計	11	8		1		2	22
ア パ レ ル	2年次	10	4					
	3年次	1						
	計	11	4					15
7 ハ I	平9	11	1				1	
	平10	11						13

※ 7A' : 7A'II技術の略

7A' II : 3年次履修科目

② 1996年度(平成8年度)

		服'サ'	調理 I	農業基	環境科	工業基	商業	合計
ソ イ ン グ	2年次	10	1					
	3年次	0	16	2			1	
	計	10	17	2			1	30
ア パ レ ル	2年次	6	5				1	
	3年次	0	2					
	計	6	7				1	14
7 ハ I	3年次	3	2	2				7

③ 1995年度(平成7年度)

		服'サ'	調理 I	農業基	環境科	工業基	商業	合計
ソ イ ン グ	2年次	3	2					5
	計							
ア パ レ ル	2年次	3	4					7
	計							

表12 科目別授業構成

① 保育

	年次生	調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
95年度	2年次	2	2				4	
	計							7
96年度	2年次	2	2				4	8
	3年次	4	1	1			5	11
	計	6	3	1			9	19
97年度	2年次	7					4	11
	3年次	13	6	4	7	2	7	39
	計	20	6	4	7	2	11	50

② 家庭看護福祉

	年次生	調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
95年度	開設せず							
	2年次	1			1		4	6
	3年次	7	1	2			3	13
96年度	計	8	1	2	1		7	19
	2年次		1				3	4
97年度	3年次	6	4		1		1	11
	計							15

③ 消費経済

	年次生	調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
95年度	2年次	7	1				1	9
	計							
96年度	2年次	2						2
	3年次	1					2	3
	計	3					2	5
97年度	2年次	1	5				1	7
	3年次	8	4				1	13
	計	9	9				2	20

④ クッキング

	年次生	調理 I	服'サ'	農業基	環境科	工業基	情報処	合計
96年度	2年次			選択数制限				
	3年次			2	5	2	7	25
	計							41
97年度	2年次			選択数制限				
	3年次	1	9	1	3	10	10	34
	計							
98年度	2年次			選択数制限				
	3年次			4	1	1	5	16
	計							27

おわりに

わずかに3年間の科目選択のデータであり、学校をとりまく社会環境、教育の変化から選択傾向は年々変化するものと思われるが、生徒の選択傾向を検討した結果、以下のようなことがわかった。

- (1) 各類型生徒の選択に、ある一定の傾向がみられる。
- (2) 系列の全科目を選択している生徒の割合は年度により大きな差がある。
- (3) 授業クラスに多様な系列の生徒が混在していることを感じていたが、この調査でその裏付けができた。
- (4) 学科の改編により、最も変化したのは農業科と家庭科といえよう。工業科は選択傾向から見る限り、余り変化は認められない。
- (5) 特に家庭科については、改編により受けた影響が大である。今後、生徒の選択と授業への関心度(集中度)によって変化の質に差が生じるとと思われる。

この調査を通して、より望ましい総合科学科の実現のためには、多大なエネルギーを要するが、生徒の多様な選択ニーズに応えられるように、多くの科目を用意した理想的な時間割編成が必要であると改めて実感した。

本稿をまとめるに当たり、お世話になりました阪本先生、家庭科の諸先生方に感謝申し上げます。